“大学に求めていたこと”と“大学で得たこと”

加藤佳子
生物資源学類　科目等履修生

はじめに

私は現在、教員を目指して科目等履修生という身分で大学に在籍しています。しかし、教員を目指すことを決めるまでに、だいぶ時間がかかりました。

私は、平成11年に生物資源学類を卒業し、その後、バイオシステム研究科を修了、民間会社に3年勤めた後、仕事を辞め大学に復学して今に至ります。決して自分の生き方が気に入っているわけではありませんが、大学とは何かを考える少しの材料となれば幸いと思い私が大学生活をどのように過ごし、そこで何を得たのか述べたいと思います。

大学の選択

なぜ筑波大学を選んだのか。大学の選択というのは、私にとって初めての大きな人生の選択でした。受験が近づくにつれて、大学で何を学ぶのかを考え始めましたが、特にこれといってやりたいことがあるわけではなく、生物が好きだったことと、理系の研究にあこがれていたこと、砂漠に木を植えたいと思っていた事で筑波大学の生物資源学類を受験しました。つまり、実際に何を勉強するかは、大学に入って見つけようと思い大学に入学したわけです。そして、私が大学に期待していたことはもう一つ、様々な人と知り合いたいということでした。

大学生活への後悔と大学院生活

大学に入って、私は、“知らないことがもっともっとあるはずだ。それを知ったならば、きっとやりたいことが見つかるはずだ”と考えていました。しかし、そのために私がとった方法はひたすら講義を受けることでした。そのころの自分はそれほど多くの講義を消化することができなく、講義中は、しっかりと理解していないものの何がわからないのかわからず、先生に質問す

ることもできず、テスト前にわからないことが出てきてもそのままになっていました。

そして結局、特別興味を持つものも見つからず、知り合いや友人は多くできたもののだいたいが同年代で、先生とのつながりも全く持たないまま研究室選択をする3年生の後半を迎えてしまったのです。

大学に復学して3年ぶりに大学の講義を聴いてみてこの頃と比較すると、以前よりも講義を楽しく感じました。私が以前に在学していたときよりも講義自体が工夫されているのか、それとも私の講義を聞く姿勢が変わったのか。多分両方だと思います。

講義を聞く前にある程度知識があるため、わからない所を集中的に聞けるというのもわかりやすい理由だと思います。大学在学中も、授業前に予習していればもう少し講義の内容が身についたのでしょうが、予習のために何をしたらいいのかもわからなかったのかもしれません。

そんな私でしたが、4年生のときに所属させていただいた研究室で運良くアオコという研究テーマに出会うことで私の人生は大きく変わりました。また、教育実習に行った事も大きな転機でした。

この時になってやっと自分の知りたい事のために勉強するということが解ってきたように思います。また、やりたいことは実際にやってみないとわからないと気付いたのもこの頃でした。

卒業研究の時点では、自分が何を研究したいのか、全く思いつきませんでした。最初はテーマを与えて頂いて、実験をしているうちに、だんだんと方向が見え始め、修士論文のための実験をしているころには、知りたい事が増え、実験して確認したいことが山積みで、いくら時間があっても足りない気がしました。講義、実験、勉強。大学生活を1年持ってきたいくらいでした。

大学の時には、勉強しているつもりだったことが全く身についていないことを実感したのもこの頃です。講義をたくさんとって、幅広い知識を身につけることで、研究に生きてくると思っていたのですが、自分で利用するほどに知識は自分のものになってはいませんでした。

就職と退職と上司のことば

教育実習に行った事で、教職を目指すことも頭にはあったのですが、アオコに関する研究をしたことで、環境問題と扱っている実際の仕事についてみたいという思いも強くなっていました。

そこで採用していただいたのが、環境分析の会社でした。ここでは、本当に様々なことを学びました。小さい会社でしたので、一人一人がカバーする分野が広く、勤めていた期間は3年と短いものでしたが、ここ

でこそ幅広い知識が身についたように思います。

会社に愛着はあったのですが、どうしても教育実習の楽しさが忘れられず、教員を目指すことに決めたときに、会社の上司にいわれた事は、本当に自分に合った仕事かどうかは、実際にやってみなければわからない。実際にやってみて、もし合わないと思ったなら、次のことにチャレンジするくらいの気持ちを持ってやりなさいということでした。やりたいことが例えみつからなくても、次に始めることが必ず自分のやりたいことでなければいけないということはないんだという言葉は、自分の生き方はそんなに駄目なものでもないなあと気持ちが少し楽になるものでした。

今思うこと

今、いろいろなことを経験して思う事は、大学は講義を受けるためだけのものではなかったということです。そして、ただ普通に大学生活を送るだけでは、自分のやりたいことを見つけられない人が多いのではないでしょうか。最近話題になるNEETの存在も、やりたいことがないからそういう状態にいられるのだと思います。

目的がないときにどうやって目的を見つけるか。私は、とりあえずやってみる事だと思っています。実際にやってみる前にそれが絶対に自分のやりたいことだとわかる人はそういません。失敗してもいいから、やってみないことには始まりません。私のように何を研究したらいいのかわからずとりあえず始めたとしても、やっているうちにやりたいことが見えてくることも多いのでしょう。研究室を3年生の後半から探したのでは私のような学生も存在してします。可能であるなら、所属研究室は定めなくても興味のある分野の研究室のゼミに2,3年から出席し、内容がわからないにしても、何を勉強したらいいのか考える機会を持たせられないものでしょうか。そして、研究室の先生や先輩方から、研究の内容を雑談として聞くうちに講義の中の遠い存在ではなく、自分がこれから研究する対象として見る事ができるようになるのではないかと思います。また、研究室に関わる事で、同年代だけではなく、先生方や先輩とのつながりもでてくるのだと思います。

また、科目等履修生として在学していると、社会人を経験して復学している人に出会うことがよくありますが、自分の不足している知識を補うために復学しても、講義では自分の期待していた知識は得られないという話を聞く事があります。結局、大学で講義を受けて自分の知りたい事が取り上げられるのを待っているのであれば、テレビなどの教養番組でもいいのです。自分の

知りたいことに詳しい先生を講義で見つけ、直接自分で聞きに行かないと自分の知りたいことは聞けないと感じました。

私は、大学院までかかりましたが、生物や研究の楽しさを知り、自分の思った事を実行するだけの行動力を身につけ、多くの人とのつながりの大切さを知ることができました。大学に最初に求めていたような自分のやりたいことが本当にみつかったのかわかりません。しかし、悩んだときにアドバイスをして下さる先生方や会社の上司にも恵まれこれから先自分の目標を探しながら、頑張っていけると感じています。

最後に、私のこのような考えはおそらく先生方や経験を積まれた研究者の方にはあたりまえのことだと思います。しかし、人生に迷ったり、悩んだりしている経験の浅い若者の考えを改めて読んたことで、学生に援助の手を差し伸べることを考えて頂けるなら幸いです。この一経験談が、自分の目標を見つけるために行動できる学生を増やし、大学の研究の質が向上する事に少しでも役立てることを願っております。

（かとう　よしこ）